The qualitative aspects of bank lending

横浜市立大学　随清遠

2024 年度全国大会「春季大会」報告論文要旨

本研究は、銀行の貸出金担保に注目し、下記の問題について実証的に検討を行う。すなわち、国内銀行の融資不動産担保、信用担保及び保証担保などの各種担保の内訳はどのように推移してきたか？担保の取り方は、銀行経営にどのような影響を及ぼすのか？時間とともに変化する各種担保シェアはどのような要因に影響されるのか？銀行の貸出供給は、担保の取り方にどのように影響されるのか？これらの問題意識は以下の観察に基づく。国内銀行貸出対 GDP 比率は、1980 年代の上昇とその後の下落を経て、2005 年以降徐々に回復し、2020 年以降はバブル期の最高水準を上回るまで回復した。しかし、この間の経済成長率は低い水準にとどまっており、景気が回復するにはほど遠い。

企業の資金余剰や銀行の超過準備は、特定の市場環境における取引の結果にすぎない。本論文は、これらの側面を金融仲介の「質」的側面と定義する。金融仲介の「質」的側面には、審査のプロセス、債権の保全措置、金融契約の条項規定など多方面の内容が含まれると考えられるが、本論文では、銀行の担保請求のあり方に注目し、上記の問題を実証的に検証する。これらの問題の検証を通じて、近年の金融仲介における「質」的変化を究明し、それが資金供給への影響を評価したい。日本の潜在的成長性はもっと高い水準にあり、それが実現されていない。すなわち、潜在的に高い生産性を持つ部門において何らかの理由で生産が実現されていない。金融仲介の量的変化に現れない質的変化がその背後にあるだろう。本研究の問題意識はこのような認識に基づいている。

本研究の結論は下記の通りである。すなわち、バブル期に大きく不動産担保に依存した銀行は、その後の銀行経営に大きな負の影響を及ぼした。具体的には、銀行破綻とピーク時の不良債権比率はいずれも不動産担保シェアに正の影響を受けた。逆にバブル崩壊後の 10 年間の経常利益率に負の影響を与えた。バブル崩壊後、銀行が不動産担保シェアは平均値として一貫して下落する傾向にあったが、2007 年度以降、むしろ大銀行ほど不動産担保に依存する傾向が強い。不動産担保シェアの高い銀行は、貸出総額、製造業貸出を減らしている一方、個人部門貸出や日銀預け金にはむしろ促進する傾向が観察される。信用担保はほとんどすべての項目について不動産担保と逆の影響をしている。

本研究は、景気低迷の背後に「質」の側面における金融仲介の変化があったという仮説に基づいて行われた。伝統的日本の銀行が不動産担保に依存してきたが、近年このような慣行は経済発展にマイナスの影響を及ぼしている。金融仲介の効率性を高めるために、動産担保を高めるなど質の面のおける改善が重要な課題となる。